



Title	<紹介>伊井春樹著『光源氏の運命物語：「かたり」から読み解く新しい『源氏物語』』
Author(s)	小林, 理正
Citation	語文. 2018, 111, p. 65-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/77192">https://doi.org/10.18910/77192</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伊井春樹著『光源氏の運命物語』「かたり」から読み解く  
新しい『源氏物語』

小林理正

書名にもみえるとおり『源氏物語』を「かたり」という視座から読み解き、新たな解釈の提示を試みたものが本書である。全五十四帖という大部な『源氏物語』にあって、本書はいわゆる正篇の第一部を取り扱つたものである。以下、本書の構成を掲げる。

はじめに／『源氏物語』への招待

一 光源氏の須磨での危機

一 桐壺院の出現（暴風雨と落雷／巳の日の禊）

二 桐壺院の告白（地獄からの救出／桐壺院の行動）

三 源氏の危機的状況（藤壺の出家／臘月夜への通い）

四 御陵における桐壺院の姿（藤壺中宮の身のふり方／桐壺院の出現）

二 源氏の須磨行きの決意

一 源氏の寂寥（藤壺中宮への恋慕／六条御息所の伊勢下向／源氏の運命の変転）

二 須磨への左遷説（源氏の須磨行き／須磨での生活）

三 流罪された人々の運命と源氏の須磨での謫居  
一 源高明と源氏（高明の配流／高明の騒動／高明と紫式部）

- 二 伊周の悲劇（一族の繁榮／伊周の須磨から筑紫へ）  
三 菅原道真の流罪（栄華からの転落／天神となつた道真）  
四 臘月夜事件と藤壺中宮との密事  
一 臘月夜との出会い（藤壺中宮への思慕／臘月夜との逢瀬／臘月夜との再会／「花宴」の巻末表現）  
二 右大臣の腹立ち（桐壺院の崩御／臘月夜の尚侍）  
三 犠牲となつた臘月夜（臘月夜の待遇／藤壺中宮の出家）  
五 源氏の須磨での生活  
一 臘月夜との奇妙な関係（源氏の臘月夜への思惑／右大臣の憤懣／源氏の危機的状況）  
二 源氏の流謫（須磨での生活／住吉の神の「さとし」／弘徽殿大后的言い分／源氏の召喚）  
三 梅壺女御の入内（無罪の配流／無実の主張／前斎宮の帰京／梅壺女御の入内／六条御息所の年齢／藤原氏と源氏の争い）  
六 須磨の絵日記  
一 絵日記の整理（紫上と見る絵日記／冊子から巻子本へ／源氏の絵）  
二 絵日記の意義（源氏と紫上の絵日記／帝前の絵合／古代への憧憬／旅日記の勝利）  
三 源氏の栄華への階梯（土佐日記）の絵日記／絵草子の流行／絵日記の場面／絵日記の行方／明石姫君の入内）  
七 明石君一族の宿世

- 一 明石入道の野心 〈明石入道の夢／桐壺院の靈／明石入道の半生／運命の糸／明石君の結婚話〉
- 二 源氏と明石一族 〈明石入道と桐壺更衣／明石入道の訴え／明石姫君の誕生〉
- 三 明石の入道の夢 〈明石君の上京／六条院の造営／明石君出生の秘密〉
- 八 桐壺更衣の運命
- 一 桐壺院の更衣への寵愛 〈若宮の誕生／若宮の春宮位断念／故大納言一家〉
- 二 大納言と明石一族の運命 〈大納言の夢／桐壺更衣と藤壺中宮／源氏と冷泉天皇〉
- 九 桐壺院の贖罪
- 一 高麗人の運勢 〈若宮誕生／高麗人の予言〉
- 二 源氏の臣籍降下 〈源氏の帝王の相／源氏の後見者としての相／桐壺院の決断〉
- 三 桐壺院の歴史語り 〈醍醐帝と桐壺院／道真と光源氏〉
- 四 源氏と桐壺更衣のもう一つの姿 〈源氏の運命／源氏と冷泉帝〉
- あとがき
- ( ) 内は各節以下の小見出し
- 須磨流離にまつわる章が五つ（一～五）、総合卷についての章（六）、明石の一族と源氏が結ばれるに至る経緯とその後について述べる章（七）、桐壺更衣を中心とする章（八）、そして桐壺院に

焦点を絞った章（九）、以上九章から本書は構成されている。  
如上のごとき構成である本書には思わず膝を打つような新しさが溢れている。とりわけ、たびたび取りあげられる臘月夜をめぐる解釈は臘月夜の物語でのよりようを再考する必要性を感じさせるものである。この点ひとつとっても「かたり」から読み解く新しい『源氏物語』の提示を試みた著者の目論見は成功したといえよう。

また「書き終えてみると、まだまだ不足な点もあり、さらに後半で源氏の運命はどうのような展開になるのか、書き続けなければとの思いもする」と「あとがき」にて著者はいう。物語の「語られていない背景」（はじめに）を見事に浮かびあがらせ、「新しい『源氏物語』」を読者に提示して見せた本書を一読した者ならば「国文学者、伊井春樹ワールド」（本書帯文）の次なる開幕、つまり、第二部を扱う次著を期待せずにはいられない。

なお本書は平成二八年度中古文学会秋季大会（於・大阪大学）における「桐壺院の贖罪」と題した記念講演を基にしたものである。『中古文学』第九九号に当該講演はすでに収録されており、講演内容と本書を読み比べることで、あの「国文学者、伊井春樹」がどのような理路をたどり『源氏物語』を読み解いたか追体験できる点も本書の魅力のひとつといえる。

(笠間書院、二〇一八年三月、三三〇頁、三五〇〇円+税)